

One purpose

FOR BETTER COMMUNICATION



同志社大学通信
DOSHISHA UNIVERSITY

特集

それは、

神が与え賜いし使命

同志社大学

障がい学生支援の現在

●同志社人訪問

阪神タイガース投手

渡辺亮さん

に聞く



『ONE PURPOSE』は学生・卒業生の皆さんとのコミュニケーションをはかることを目的として発行しています。ささいなことでも結構ですので、どしどし広報課までご意見・情報をお寄せください。

大学の活動



特集

それは、神が与え賜いし使命 ---- 2 同志社大学 障がい学生支援の現在

同志社大学のエコへの取り組み ----- 7

同志社の研究は今 ----- 9

社会と芸術の関わりを学際的に研究する21世紀の「自由国際大学」
社会・芸術国際研究センター 岡林 洋 文学部美学芸術学科教授

「クラーク・チャペル」でウェディングを ----- 11

CAMPUS NEWS ----- 12

同志社大学に新しいキャラクター登場！／心理学部開設記念シンポジウム開催／シェフィールド大学同志社センター設置記念講演会を開催／DOSHISHA Forum in UK on International Strategy開催／敷地内禁煙実現に向けて／特定寄付奨学金募金協力者ご芳名／本学教職員の執筆図書を紹介／新任・退職教員

在学生・教員の活動

OP COMMENTARY ----- 17

与えられたものの記憶 杉若 弘子 心理学部教授

MY PURPOSE ----- 27

在学中にアンティークのwebショップを開業 ～女性が結婚・出産しても働ける会社を作りたい～
岩田 紗代子さん(大学院総合政策科学研究科博士課程(前期課程)2年)

卒業生の活動



INTERVIEW ～同志社人訪問～ ----- 18

阪神タイガース投手
渡辺亮さんに聞く

卒業生通信 ----- 21

・岡本 博文さん(1983年文学部社会学科社会学専攻卒業)
・中居 成子さん(1986年法学部政治学科卒業)

MY JOB, MY LIFE ～シリーズ 私と「仕事」～ ----- 23

・亀井 みかさん(1990年法学部法律学科卒業)
・川北 正勝さん(1999年工学部機能分子工学科卒業)

ANNOUNCEMENT ----- 25



表紙の情景 [臨光館]

1959年、日本電池株式会社跡地の本館を改修し、誕生したのが初代臨光館。現在の建物は二代目に当たり、主に教室不足対策のため2005年9月に竣工。事務室や書庫、研究室、食堂など、バラエティに富んだ機能を備える。凛とした佇まいが美しく、隣の尋真館に続く3階ブリッジ部分には、新島の有名な言葉「諸君ヨ、一人一人ハ大切ナリ」が刻まれている。

今年4月より、神・社会の2学部が主な学修校地を今出川キャンパスへと移した。新町キャンパスの重要性も高まる中で、ますますの活躍が期待される。



Challenged それは、 神が与え賜いし使命

同志社大学 障がい学生支援の現在

Challenged(チャレンジド)——アメリカでは「神様からチャレンジという使命を与えられた人」という意味で、「障害のある人」をこう呼ぶことがある。

同志社大学では障害をマイナスと捉えず、ポジティブな意味で「障害がある学生」を「Challenged」と呼び、彼らが希望するすべての授業について、「障害のない学生」と同じレベルで受講できるよう様々な支援を行っている。

ノートテイク(要約筆記)、パソコン(PC)通訳、ガイドヘルプ…

そしてChallengedの支援活動にあたるサポートスタッフも、学生が中心となっている。

Challengedを支えることによって、スタッフとなった学生たちもまた人間として成長していく。その意味で「神様からの使命」は、支援される人、する人の両者に与えられたものと言えるだろう。

Challenged支援活動の窓口となる学生支援センター・西村卓所長のインタビュー、実際に支援を受けるChallengedとサポートスタッフ学生のヒアリングを通して、同志社大学における障がい学生支援制度の現在を見る。





西村卓 学生支援センター所長

本学における障がい学生支援は、戦後間もない1949年、視覚障害のある学生の受験機会を奪ってはならないという思いから、日本で初めて大学入試において点字受験を実施したことから始まりました。視覚障がい者に対する支援の歴史は古く、常勤の点訳者を教務課職員として配置していた時期もあります。その後、1982年に大学長の諮問機関として「障害者問題委員会」を設置。86年には京田辺キャンパス開校にあたり、ハード面でのバリアフリー化に設計段階から取り組みました。一方、今出川キャンパスについては、既存の施設に付加する形で、建物入口のスロープや自動昇降機、自動ドアなどの設置を進めてきました。これらの支援に積極的に取り組んできた本学は、現在は日本学生支援機構(JASSO)の「障害学生就学支援ネットワーク事業」拠点校として、連携協力を行っています。

ひと言に障害といっても様々な種類があり、視覚障害・聴覚障害、肢体不自由、また内臓障害といった内臓等の疾患を持つているケ

ースもあります。それぞれの学生に対する適切なケア、サポートが可能なシステムをどう構築していくかは本学に限らず全国の大学における重要なテーマです。大学自体がユニバーサル化の中で、障がい者が大学で学びたいという望みをしっかりと受け止めなければならない。それには全般的な障がい者支援が必要だということで、2000年3月に出された障害者問題委員会からの答申を契機として、同年5月に「障がい学生支援制度」をスタートさせました。それまでの支援内容は、ハード面のバリアフリー化を進めると

障がい学生支援は、 障害がある学生のため だけのものではない。

援は、障害のある学生のためだけにあるものではない」という考え方です。私たちは、障がい学生支援をサポートしてもらったために、学生スタッフを集めているのではありません。障害のある学生を支援することによって、障害のない学生も支援される、つまりその活動を通して、サポートに携わる学生自身も人間として成長できるのです。直接の会話すら難しいこともある関係の中で、いかに意思や考えを伝えあうかを模索することで、コミュニケーション能力が向上する。そして障害を持つている人に接することによって、自分自身の心が温かく豊かになる。そうならば、障がい学生に対してばかりでなく、他の人たちに対する見方も変わってきます。浅薄なヒロイズムではなく、誰もが自然に障害のある人に手を差し伸べることができる。同志社大学を、そんな人間を育てられる、やさしい大学にしていきたいと強く望んでいます。

また、障がい学生支援における重要なポイントには、講義保障については教職員の理解が不可欠だということです。例えば、聴覚障害があり、読唇ができる学生がいるとします。講義中、常にはつきりとした唇の動きで、その学生に向かって話せるかどうかなどは、教員が意識しなくてはなりません。障がい学生を支援することは当然だという意識、そしてそのことは同時に、障害のない学生に対する支

障がい学生支援室の取り組み



■ランチタイム手話

開講期間中、京田辺キャンパスで火・金曜日、今出川キャンパスでは月・水曜日、学生支援課の職員と学生が気軽に集って行く、ランチを食べながらのよもやま話。どこにでもあるような風景だが、違うのはその中に聴覚障害を持つ学生が混じり、会話が手話を交えて行われていること。手話は、障害の有無に関わらない、共通のコミュニケーション手段。昼のひととき、日常の何気ない会話を通して手話のテクニクと心を身につけていく。



■Challenged キャンプ

障害がある学生とない学生が寝食を共にし、交流を深めることにより「心のバリアフリー」を目指す2泊3日のキャンプ。参加者はアイマスクや耳栓、あるいは車椅子などを使って自分にはない障害を疑似体験し、いつもとは違った視点で社会や生活を考える。またミーティングでは障害に対する思いを本音でぶつけ合い、それぞれの障害の意味を考えて共有し合うことで、自分の認識を新たにする。貴重な体験ができる3日間。



■夏期集中体験講座

夏期休暇を利用して、両キャンパスを舞台に様々な体験にトライする2日間の集中講座。手話を覚えてじっくり会話を楽しみ、点字を覚えてキャンパス内の点字を読んでみる。あるいは車椅子に乗ってキャンパスを巡り、アイマスクをして食事をするなど。学外からの参加者も交え、障害に対する理解を深めることができる。

障がい者用施設・設備



スロープ



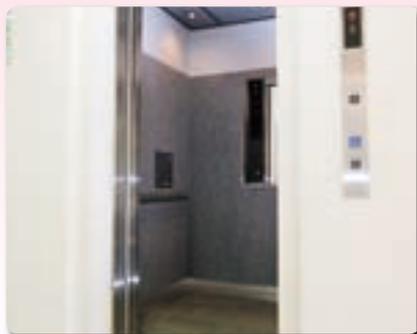
身障者用駐車スペース



呼び出し用インターホン



身障者用リフト



身障者用エレベーター



身障者用トイレ

支援する人、支援される人、



大西 祐伊さん

●「障がい学生支援制度」があるから同志社を選んだ

「大学の授業にちゃんとついていけるのか、最初は不安でいっぱいでした」

大西祐伊さん(商学部2年次生)は、生まれつき耳が聞こえない。3歳になっても何もしゃべらず、話しかけても反応がなかった彼女は、その様子を心配したお母さんと病院に行き、聴覚障害であることが判明した。

だが今、手振りを交えて話す大西さんの声は、時々発音が不明瞭になるものの、十分に聞き取ることができる。「話せるようになったのは、お母さんの奮闘があったからだ。」「聞こえないことがわかってから、お母さんが訓練してくれたおかげで話せるようになりました。小さな頃から口の形を教えるもらい、舌を噛んだりしたら注意してくれるなど、付きつきりで指導してくれました」

小学校、中学校は難聴者が集まった少人数クラスで国語や算数(数学)、英語の授業を受け、他の科目は健常者の生徒と同じ教室で



南 彩華さん



海津 奈都子さん



前田 綾さん

勉強した。高校ではすべて普通のクラスに入り、入学当初はついていけるので精いっぱいだったが、丹念な予習復習に加え、わからない箇所は先生にまめに聞きに行くなど、自力で努力を重ねて克服した。ハンディキャップを背負いながら、3年生の頃には有名私立大の推薦をいくつももらえるほどの成績を残したのは、並大抵の頑張りではなかったろう。

そんな彼女が同志社大学に進んだ決め手は、「障がい学生支援制度」の存在だった。

「どの大学にするか決められず、いくつかオープンキャンパスに参加したのですが、同志社で『聴覚障害の学生に対する配慮はあるので

すか』と尋ねると、担当の方がとても丁寧に教えてくださったのです。『しっかり制度が整っている』と感じ、それから色々調べてみた中で、やはり同志社の支援制度が一番充実していました」

入学が決まっても、支援制度の利用や内容などについて、障がい学生支援室に相談し、利用登録をした大西さんは、主にPC通訳の支援を受けている。

聴覚に障害のある学生は、教員の講義を聞くことができない。PC通訳では、サポートスタッフが講義を聞いて逐二パソコンに打ち込み、障がい学生はディスプレイの文字を読むことで内容を理解する。速く打たなくてはならないため、スタッフの学生はキーボードを見ずにタイプするブラインドタッチができることが基本だ。通常は1人の障がい学生にスタッフが2人つき、2台以上のパソコンをつないで連携入力を行う。同じ講義で障がい学生が2人以上なら、教壇の横にパソコンの画面が大きく映し出される形で行う場合もある。誤変換などの問題がつきまとうため、一定の言葉の知識やスキルは欠かせない。

●支援スタッフに登録する学生は増える

支援活動に参加を希望する学生は、まず

「支援制度スタッフ登録書を障がい学生支援室に提出。同時に、活動可能な内容や時間帯、校地などを申請する。支援内容別の講習会を受講して準備を行い、サポートを受ける障がい

学生との調整が終われば、活動開始となる。

2008年時点における障がい学生数は100人。そのうち支援を受けたいと希望している制度登録学生が21人。したがって障害を持ちながら、その程度によって制度を利用しない学生もいる。支援スタッフ登録者は、制度発足の00年春学期で46人、秋学期67人であったが、年々増加してきた(6ページ参照)。07年は06年に比べ人数が減少しているように見えるが、これは06年まで有償無償で分けていたアシスタントスタッフをすべて有償の「サポートスタッフ」として07年から統合し、その両方に登録していた学生の重複分が減少したからである。また、支援を必要とする学生は年度ごとに増減するため、募集を調整するなどして対応している現状だ。西村卓(学生支援センター所長)は「登録している障がい学生に対するケア、サポートは100%充足しています。ですのでスタッフが足りないという状況でもないので、支援スタッフへの登録を希望する学生は今後増えていくと思っています」と言う。

大西さんの講義保障をPC通訳で支えるスタッフの1人、前田綾さん(法学部法律学科1年次生)は「入試に合格して届いた書類の中に支援制度のパンフレットが入っていて、それを読んでやってみようと思いました。もともと人の役に立ちたいという気持ちがあり、タイピングも得意だったので、スタッフ登録をした理由を話す。

だが、モチベーションになっているのは、奉仕的な感情ばかりではない。海津奈都子さん(法学部政治学科2年次生)は「きっかけは前田さんと同じですが、私の場合はタイピ

どちらも大切なひと一人

ングそのものが好きで、自分の特技が生かせる「仕事」であることと、自分が履修している科目以外の授業を聞けることも大きいです。自分の専門分野とまったくつながりのないような授業だと、本来得られないはずの知識を与えてもらえます。それがとても心地よくて、自分の授業より集中しているかもしれない」と、自分自身への好影響を指摘する。



講義でPC通訳を受けている様子

●苦勞した分だけ スキルがアップする

大西さんへのPC通訳はスタッフ2人が呼吸を合わせて、リレー式に交互に文章化していく。大西さんは教員が話す間、休むことなくパソコンの画面を目で追う。講義の時間中、絶え間なくそれが続くのだから、負担は双方にとって小さいものではない。サポートする側とされる側、それぞれの「苦勞」を聞いてみた。

「パワーポイントなどを使用する講義では、スクリーンに映る画面が切り替わりつつ、先生も口頭で説明されます。パソコンの画面もスクリーンも両方見ながらというのが大変で、どちらかに注目しているともう片方が見れないのです。パワーポイントは要点をまとめてあり、詳しい説明はパソコンに出てくるので、どちらも見たいのですが…」（大西さん）

「集中していないと、ペアのスタッフと同じ文章を打ってしまったり、そのせいで次に打つべき文章がしっかり聞けていなかったりすることもあります」（海津さん）

「90分間ずっと集中していないといけないのに、途中で疲れてきて眠くなることもあります。授業を聞いていただけなら、自然に耳に入るので大丈夫なのですが」（前田さん）

南彩華さん 社会学部社会学科2年次生
「先生の話方が速いと、うっかり重要なところを聞き逃してしまいます。それに『あれ』『これ』などの指示語は、文字でそのまま打ってもわからないので、自分の中で変換しなく

てはなりません」と話す。

だが、そうした苦勞がある反面、海津さんが「瞬間的に要約する必要がある話も多く、人の話に対する理解力やタイピングの速度があがりました」と言うように、大変な分だけ、サポートする側には経験を重ねることによって自分のスキルアップにつながる利点もあるようだ。

●支援活動が消し去ったもの、与えてくれたもの

「私1人では授業を受けることはできません。こうしてサポートしてくれるのが同じ学生ということはとても嬉しいし、安心できます。講義の前後に時間がないとあまり話せませんが、余裕がある時はゆっくり話ができて、仲良くなることも多いです」

そう話す大西さんの明るい表情に、入学前に抱いていたという不安はまったく見当たらない。

支援スタッフとして大西さんたちをサポートする3人も、支援活動を始めたことで自分の中に変化が現れてきた、と声を揃える。

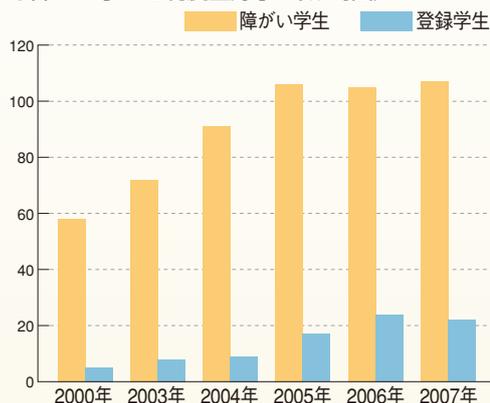
「正直、今までは障害のある学生とあまりふれ合うことがありませんでした。支援スタッフになってから、もっと積極的にコミュニケーションを取りたいと思うようになりました」（南さん）

「同じ年で同じように生きてきたのに、彼女たちは見えない聞こえないという中で生活してきています。それを思えば、自分ももっと頑張らないといけないと、逆に力をもらっています」（海津さん）

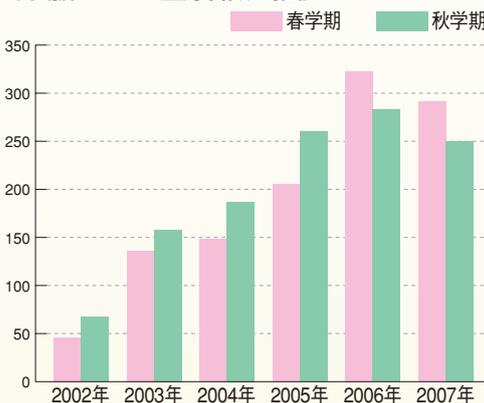
「障害のある学生とも、ごく普通に自然に接するようになりたい。そう思うようになったのは、支援活動を始めたおかげです」（前田さん）

ヒアリングを終え、笑顔で談笑する彼女たち。そこに「一人ひとりを隔てる」心のバリアは見えなかった。 ※学年は取材時

●障がい学生と制度登録学生数の推移



●支援スタッフ登録者数の推移





■メディアを通じて

環境問題を発信していく

京田辺校地省エネルギー推進委員会のもと、大学と学生が連携し、様々な環境問題に取り組み「同志社エコプロジェクト」(DEP: Doshisha Eco Project)が発足したのは、2007年4月。学内の省エネ活動を推進し、また自然環境や資源エネルギー、廃棄物などの環境問題に対して積極的にアプローチすることで、学内の環境保全意識を高めるとともに、具体的な解決策を学内外に発信する活動組織だ。

現在は、ローム記念館内に拠点を設け、ホームページや広報誌による広報・啓発活動や学内の省エネ推進など、環境に関する幅広い課題に取り組んでいる。所属する学生メンバーは約45人。彼らを統括する学生リーダーである鈴木一

登さん(大学院工学研究科博士課程(前期)数理環境科学専攻1年)は、環境系サークル「cycle」の設立メンバーでもある。

「サークルで活動に取り組む中で、もう一歩進んだ形で環境問題に携わりたいと考え、工学部環境システム学科4年次生の時にDEPに参加しました。この2年間で、私たちの活動は一般の学生にもかなり浸透してきたと感じますし、環境に対する意識自体も上がってきたと思います」

鈴木さんとマネージメント部広報部システム部など各部のリーダーたちで運営部を構成。一方活動部の中には、スタッフ全員で行う全体プロジェクトや、有志メンバーによる個別プロジェクトが存在するという組織編成である。

活動部のプロジェクトの中でも特に注目したいのが、ローム記念館プロジェクト「あすみチャンネル」(正式名称は「環境問題に係わるテレビ番組制作プロジェクト」)だ。webや映像による情報発信を通して環境問題にアプローチするプロジェクトで、学生が主体となってテレビ番組を制作し、ケーブルテレビ局の協力を得て実際にその放送を行うというものである。食物の地産地消の実情や、後世に残した環境などについて取材し、それを元にした



あすみチャンネルのスタジオ収録

ドキュメンタリーVTRを作成する。スタジオでは、学生がキャスターとなって前述のVTRを紹介することで、1つの番組として構成するという流れである。テレビ局の技術的サポートを受け、試行錯誤しながら現在も制作を進めている。それが1つの成果となることで、学内における情報発信の可能性や、今後の活動の幅が広がることに繋がると期待されている。

「メディアを通じて環境問題を発信していく」と発案したのは、プロジェクトリーダーの小林楓子さん(社会学部メディア学科3年次生)。環境問題に対する意識を向上させていくには継続性が重要。ケーブルテレビ、webの2つを主なツールとして、『あすみチャンネル』を継続的に配信していきます(ホームページより)と意気込んでいる。

■DEPがあることを同志社大学の誇りに

DEPが発で開催されたイベントに、昨年6月、同志社大学に世界14カ国19大学約70人の学生が集まって行われた「世界学生環境サミット『京都』」がある。日本代表として参加し、それをきっかけにDEPに加わった今井純さん(法学部政治学科2年次生)が話す。

「サミットで各国の大学生と議論をする中から『世界学生環境ネットワーク(ISSEN)』を創設し、同志社大学に本部を置いて取り組みを始めました。また、そちらを手伝う一方、ISSENから独立した『グローバルコミュニケーション(GC)』というプロジェクトを、DEP内に立ち上げました。そこでは、カナダのビクトリアで第2回の開催を予定している世界

世界学生環境ネットワーク (ISSEN) の設立

2008年6月、大学と学生が協力して、北海道洞爺湖サミットに参加する各国首脳へ世界の学生たちの意見を提言するため「世界学生環境サミット『京都』」を開催した。同志社エコプロジェクト(DEP)の学生を中心とした呼びかけに、G8の国々や中国、インド、韓国の大学から多くの学生が京都の地に集った。

世界学生環境サミットでは、インターネットによる事前討議と3日間に行われる会議の成果として、これからの地球環境を守るために世界の学生が連携していくことを宣言した。また、そのための具体的な組織として、インターネットを活用した学生組織「世界学生環境ネットワーク(SEN: International Student Environmental Network)」の設立を約束し、その本部の設置と運営を同志社大学が担うことが決定した。

ISSEN設立の詳細については、次のとおりである。

1. ISSEN設立の趣旨と目的

ISSEN設立の趣旨と目的は、世界の大学生が情報を共有化し、交流を深めることにより、地球温暖化など世界的規模の環境問題の解決に向けて取り組むことにある。

2. ISSEN本部 (SEN Head Office)

ISSEN本部の名称は「世界学生環境ネットワーク本部」: SEN Head

Doshisha Eco Project) は今





京都環境フェスティバルでのプレゼンテーション

写真右から
●鈴木一登さん
●今井紘さん
●高野恵理子さん
●村田諒平さん



学生環境サミットに、DEPでの成果を送るための取り組みを進めています。まずGCでの議論をまとめ、インターネット上で各国の大学生とも意見を交換。その結果を学生意見書という形に作り上げて、ピクトリアで完成させる予定です。GCから1〜2人、DEPの代表として参加することになると

「同志社エコプロジェクト(DEP:」

思います」
今井さんは昨年12月、東京で開催された「全国大学生環境活動コンテスト(エココン2008)」にも、同志社大学を代表して参加した。そこで思ったのは、「DEPはいかに恵まれているかということ」だったという。
「北海道から沖縄まで、全国から熱い思いや様々なアイデアを持った大

学生がたくさん集まりました。しかし、それが予算や環境に恵まれず、厳しい活動状況にあるという悩みを抱えていました。私が学生環境サミットについての発表を終えると、彼らから「これだけのバックアップの元で、世界中から学生を集めてイベントを開くなんて、簡単にできることではないし、本当に羨ましい」と言われました。私自身、それまで恵まれた環境にいないことを認識していませんでしたが、同志社大学にDEPという存在があり、大学全体で環境問題に取り組んでいることを、もっと誇りに思い感謝するべきだと感じました」

「恵まれた環境」にいるからこそ「責任感を持って活動」

今井さんとともに「エココン2008」に参加した高野恵理子さん(文学部心理学科2年次生)は、広報部長として学内外にDEPの活動を発信する役割を担う。新入生の勧誘活動や、年2回発行される学生向け情報誌『でっぶつぷ』の制作・配布・活動の年間報告書をまとめるのが主な仕事である。勧誘の時期には、ポスター作成や説明会でのプレゼンテーション準備など忙しく走り回る。

「環境活動というと難しく思われがちで、新入生を集めるのは簡単ではありません。説明会を聞きに来てくれる学生を集めるため、外でも積極的に声をかけていますが、省資源のため他のサークルのようにビラも配布しませんので、その意味でも苦勞があります。ただ、広報に携わる中で感じるのには、実は環境に興味がある人も、そして具体的にどう行動す

ばいいかわからない人も、それぞれ多くいるということです。彼らを動かすために情報を伝えていくことも、DEPの重要な役割だと思えます」

村田諒平さん(理工学部環境システム学科1年次生)は、昨年DEPの二員となった。「友人に活動の内容を話すだけでも、環境に関心を持ってもらっていると感じます。自分が考えているだけでは説得力がありませんが、ここで実際に活動しているというバックボーンがあるのは、興味を持ってもらう上でも非常に有効ですね」と、DEPの「効果」を語る。

学生と教職員が協力して環境活動に取り組むDEPのようなケースは、他大学ではあまり見られないという。学生リーダーの鈴木さんは、今井さんの言う「恵まれた環境」に対する「責任感」を強調する。

「私たちの活動予算は大学から支出されています。それはすなわち、皆さんの学費で活動しているということですから、したい活動だけをするわけにはいきません。大学のプロジェクトの二員として常に責任感を持って活動しよう」とメンバーと話しています。何十年か先受験生に「DEPがあるから同志社大学に入りたい」と言ってもらえることが夢ですね」
学内のエアコン温度統一など、大学と学生の連携により成果をあげているDEP。さらなる展開を模索し続ける彼らの、今後の活動に注目したい。

【DEPホームページURL】

<http://eco-pro.doshisha.ac.jp>

【連絡先】

同志社大学記念館(京田辺キャンパス)2階223
0774-65-7813

Office(以下「本部」とする。本部は同志社大学内に事務局を設置し、SDNの組織統括、運営全般を担う。主な活動は、本部事務局業務、加盟大学や学生のインターネットを活用したネットワーク構築及びその維持・運用、毎年行われる「世界学生環境サミット」への支援及び4年に一度の京都開催、そして募金活動等による活動資金の確保や財政基盤の整備などである。

3. SDN加盟予定の大学(2009年2月現在)

現在、世界学生環境サミット(京都)参加大学を基本としている。

スタンフォード大学、オベリン大学、ヴィクトリア大学、ウイニペグ大学、ブリティッシュコロンビア工科大学、ケンブリッジ大学、サヴォワ大学、チュービンゲン大学、フィレンツェ大学、サンクトペテルブルグ大学、ノヴゴロド大学、復旦大学、延世大学、同志社大学

本学では、SDNの活動を通じて、環境の視点からの国際交流を促進することで、国際的に活躍する人材を育成する場としても活用したいと考えている。その一環として、環境をテーマとする留学生プログラムなども検討している。

このような世界的に意義のあるSDNの活動に、学生諸君の積極的な参加と取り組みを大いに期待したい。

SDN本部事務局

(同志社大学環境保全課)

社会と芸術の関わりを 学際的に研究する 21世紀の「自由国際大学」

社会・芸術国際研究センター

2008年7月、同志社大学に開設された「社会・芸術国際研究センター」は、研究対象を社会と芸術に定め、近代アートを中心とする研究方向に特色を持つ。その設立には、1970年代にドイツの社会芸術家、ヨーゼフ・ボイスが立ち上げ、その死によって幕を下ろした研究機関「自由国際大学（F・I・U）」の理念を継承し、21世紀の京都に“復活”させようとの思いがこもっている。開設以後、100時間フリートーク・シリーズや公開講演講座を開催し、アーティスト、研究者、一般市民の交流を積極的に推し進めてきた文学部教授の岡林洋センター長に、センターの意義と目的などについて伺った。

当センターは、単純に芸術や美術についての研究をする機関ではありません。芸術や美術、演劇などは常に社会との関わりによって成立するという発想を起点とし、社会や国家のあらゆる硬直したイデオロギーから、自由な芸術と社会との関係を探求することにより、両者の創造的なあり方を模索することを目的としています。これは、オタク文化をはじめとする現代文化やアートが世界で高く評価されている日本という国において、それとは全く異なる立場から、異なる手法で芸術の可能性を考えるということでもあります。

過去を振り返ると、社会とはイデオロギーを実現する場であり、そこから国家が作り上げられてきました。その中で芸術は手段として、つまり政治のプロパガンダとしてしか使われませんでした。

たとえば、第2次世界大戦後のソビエトにおいては、共産主義思想を浸透させるために芸術が使われました。絵画は労働者を賛美するものが主流とされ、多民族国家の融合を印象づけるため、様々な民族が集まり楽しみに語り合う様子が描かれました。また一方、ナチスドイツの全体主義においては、古代ローマ帝国を理想とした国家建設が掲げられたため、ことさら古代ローマ帝国時代の芸術が模倣されました。こういった政治的利用により、芸術はきわめていびつなものとなってしまい、どちらにおいても、そのイデオロギー実現のために芸術は存在したわけです。ところが、国家が推奨するような作品は、我々に何の感動も



岡林洋 「文学部美学芸術学科教授」

与えてはくれません。一方で、国家が弾圧し不必要とした芸術の方が、民族的で野性味があり、大きな感動を生み出してくれるのです。

そういった政治的抑圧の中で、ドイツの芸術家であるヨーゼフ・ボイスは、自らも従軍した経験をもとにナチスの戦争責任を問いつつ、「イデオロギーは人間を硬直させ、自由な精神や行動を奪う」と警鐘を鳴らしました。社会の中で芸術を実践する「社会芸術」を提唱した彼は、植樹活動や環境政党の設立など様々な活動を展開しましたが、その中でも代表的なものが自由国際大学（F・I・U）の設立です。これは「大学」という理念を冠した研究機関であり、実体としてのキャンパスや教員は存在しません。しかしそれこそが、社会はひとつの偉大な芸術的総体であるべきだという思想のもと、多様な活動を行ったボイスを象徴する組織であるといえます。F・I・Uは



「でまち家」で開催された100時間フリートークシリーズの様子



形にとられない、実に多様な活動によって社会における芸術の意味を問い続けたが、ボイスの死後、自然消滅という末路をたどりました。

没後20年余が経過した現在、私はそういったボイスの考え方やF・I・Uのあり方を手本とし、また追体験する場が必要とされているのではないかと考えました。未だに終わつたその構想を京都に復活・発展させ、一切のイデオロギーを排除して、21世紀における新しい課題をとおして社会と芸術の関係を考えるため、社会・芸術国際研究センターは誕生したのです。

センターでは学際的な展開を想定しており、アーティストや学者など、多様な職業の方々を招いて運営します。また外国の方とも積極的にコラボレートしていくことで、国際的な組織としての側面も強調していきます。しかしその根本は、ボイスの「すべての人が芸術家になる」という考えであり、普通の人がどのように芸術家になっていくか、つまり社会において、どのように一般の人々が芸術と関わっていくのかにあります。

その一環として行っているのが、「100時間フリートーク・シリーズ」です。これはフリー・スクールに近い形で実施するもので、国際的なアーティストや研究者が様々なテーマに沿って語り合う場です。例えばこれまでに扱ってきたテーマは、地域社会と現代アートの関わり方や、薬物問題とアートプロジェクトなど多岐に渡り、あらゆる角度から社会と芸術と

の関係を解き明かそうと試みています。また多くの一般市民の方にも参加していただき、「すべての人が芸術家になる」とはどのようなことであり、どうすれば可能になるのかという論題について、自由に討論してもらいます。このイベントは今後もシリーズとしての展開を予定しており、5年間で100時間の開催を目標としています。100時間というのは、ボイスが学生や市民と100日間連続で討論をした逸話を元に行っているのですが、実現可能な範囲での設定にしています。ただこれでも相当な時間になりますので、非常にユニークで意義のあるものだと考えています。

また「子どもアート・ボランティア講座」と題した企画も行っています。こちらは、社会の未来を担う重要な構成員である「子ども」とアートの関わり方を考えることを目的とした試みです。お寺や小学校などを会場とするなど、形式にとらわれず色々な方法で開催しており、こちらも有意義なシリーズ企画になりつつあります。このように、芸術という捉えにくい事象を扱うからこそ、形にこだわらないイベントを今後も展開していこうと考えています。

これらが象徴するように、当センターの取り組みは、どれもが自由な形で運営されており、また誰もが参加できる間口の広いものとなっています。今後も積極的に活動を行い、普通の人々が芸術家となる可能性はどこにあるのか、そして社会と芸術はいかに関わるべきなのかという命題について、探求し続けたいと考えています。

「クラーク・チャペル」で ウェディングを



原誠キリスト教文化センター所長
メッセージ

2008年春より、クラーク記念館は創建当初(1892年定礎)の姿を取り戻して新たに甦りました。これをきっかけにして、同志社に關係する方々にクラーク・チャペルを挙式場とするプライダルを提供いたします。

同志社の創立者である新島襄は、北米ニューヨークランドの地でプロテスタント会衆派のキリスト教信仰を身に受け、日本に戻った後、同志社での教育事業とキリスト教の伝道に生涯をかけた人でした。彼が望んだことは、人ひとりを大切に育てる教育であり、良心を全身に充滿させる青年の育成です。とりわけ、新島は「受けるよりは与える方が幸いである」という聖書の言葉を大切にしましたが、これは互いに助けあい、支えあうことで成り立つ結婚生活にとても含蓄ある言葉です。

結婚式は、誕生の時と並ぶ、人生のもう一つの大切な出発点といえます。私たちは、新島の、このキリスト教的な精神を心に留めつつ、新郎新婦のパートナーシップを築きあげてあげてお手伝いをいたします。どうぞ、クラーク・チャペルでの挙式をとおして、また、結婚や結婚式についてのキリスト教的なものを見方を案内する、牧師との事前準備の日々をとおして、この出発点を充実した素晴らしいものとされますように。



誕生から110年余、いつの時代も同志社を見守り続けてきた、国の重要文化財：クラーク記念館。昨春、5年間におよび復原工事を経て、再び同志社のシンボルとして姿を現した。そして2階にある「クラーク・チャペル」もまた、創建時の厳かな雰囲気、礼拝堂として再現された。美しい曲線を描く船底天井やシャンデリア、古いオルガンなどを備えた重厚な佇まいは、まさしく同志社の品格を表しているといえるだろう。

このチャペルで、結婚式ができることをご存知だろうか。
結婚式は、キリスト教における大切な礼拝のひとつである。キリスト教主義に基づく教育の一環として、人生の門出を迎える同志社人に、素晴らしい財産であるチャペルを提供したい。同志社その思いを実現し、昨年11月より受け付けを開始。今年1月11日には第1号となるカップルが、誓いを胸に新たな人生を歩み始めた。

利用資格は、挙式者のどちらかが①同志社の卒業生②教職員(退職者を含む)とその子女または孫③その他、同志社大学キリスト教文化センター所長が認める者と定めており、チャペル利用の意義を理解してもらうことが要件。

【お問い合わせ先】同志社エンタープライズ
TEL:075-251-3043
http://www.doshisha-ep.co.jp/za/ac_6.html